



昭和30年ごろの陶器市の上有田駅風景

上有田駅、 有田駅

江戸時代の有田焼は、一般に「伊万里焼」と呼ばれていました。それは有田焼の積み出しが伊万里港で行われていたため、港の名が広まったものです。今日のように「有田焼」の名が広く普及したのは明治になってからのことです。

この名称の変化には、明治30年(1897)の武雄～早岐間の鉄道開通と有田駅の開設、明治31年(1898)の中樽貨物駅(現、上有田駅)の開設が大きく影響しています。伊万里の港に頼らずに、有田から直接全国への出荷が可能になったからです。また、明治から始まる石炭窯の時代には、燃料の石炭が両駅で降ろされました。有田の窯業、商業を物流面から見た場合、鉄道は新しい動脈で、駅は心臓部だったともいえます。

現在、道路網が整備されたとはいえ、鉄道は主要な交通機関であることに変わりはありません。上有田駅、有田駅は有田の表玄関であり、たくさんの方が普段利用しています。

この身近な存在となった両駅を、明治の昔、有田の人々はどのような目で見えていたのでしょうか。

皿山びとの歌

有田町歴史民俗資料館報

No.27

ふかがわ えいざえもん しんちゅう

深川栄左衛門真忠

有田の窯業史には、いろいろな形で現代まで影響を残している多くの人物が登場します。今回ご紹介するのは、この群像の中の一人、深川栄左衛門です。

深川栄左衛門は天保3年(1832)に生まれ、幼名を森太郎、諱(実名)を真忠といます。栄左衛門という名は深川家が襲名してきた名で、彼は第8代にあたります。主に明治維新以降に活躍した彼は、有田窯業界の大転換期とともにあったといえます。

明治4年(1871)の廃藩置県は、有田にとって佐賀藩の規制からの解放でした。しかし、同時に佐賀藩の管理組織が消滅し、新しい産業体制への移行が急務となります。

明治6年(1873)に栄左衛門ら窯焼たちは、陶業盟約を制定します。この盟約は、廃藩置県で管理者が不在となった泉山磁石場を自主的に管理し、陶石の乱掘、乱売を防ぐためのものでした。有田窯業界の自立への第一歩といえます。

もう一つの大きな流れは焼物会社の登場です。この代表格であり最初のものが、深川栄左衛門他3名により明治8年(1875)に設立された香蘭社です。有田窯業史の中で、このような焼物会社の設立は現在の有田の産業体制に直結する動きだったといえます。

香蘭社は国内にとどまらず、海外市場へ積極的な参入を目指していました。明治9年(1876)にフィラデルフィア万国博覧会に出品し、高い評価を得ています。また、明治11年(1878)のパリ万国博覧会には、深川栄左衛門自らフランスへ渡って参加しています。博覧会後、栄左衛門はヨーロッパ各地の窯業に関する設備、技術、経営方法などを見て回るとともに、先進的なフランスの製陶機械を輸入しています。彼は機械化導入により、製品の大量生産と低価格の実現を図りました。そして、これは窯業界における機械化の先駆けともなりました。

このほか、栄左衛門は有田焼がまだ生活用品と美術品の分野にとどまっているとき、工業製品としての焼物を追求しています。栄左衛門が試みたのは、電柱の絶縁体として使われる碍子(がいし)の国内生産です。今も磁器製の碍子は、工業製品として多

く生産されており、彼の功績がしのばれます。

現在、製陶は多くの過程で機械化が進んでいます。また、焼物を使った多種の工業製品が広く普及し、ニューセラミックスと呼ばれる焼物の特性を利用した、新しい工業製品が研究開発されています。彼の歩みは、有田が進むべき指針となり、現代へと受け継がれています。

陶山神社祭礼の絵図



明治18年(1885)の陶山神社祭礼の絵図

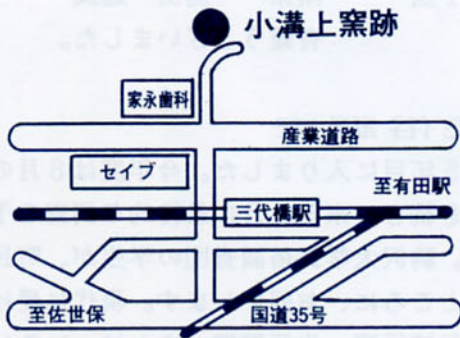
昔の絵や古い写真には、その時代そのものを反映したものがよく見かけられます。その一つが資料館にある、明治18年(1885)の陶山神社祭礼の絵図です。

現在、陶山神社といえば「焼物の鳥居」という印象が強いのではないのでしょうか。しかし、この鳥居は、明治21年(1888)に寄進されたもので、明治18年(1885)の祭礼の絵図にその姿はありません。今とは少し感じが違う陶山神社が、そこにはあります。

また、祭礼に参加している人たちには、ちょんまげの老人と断髪(だんぱつ)の若者がいます。明治18年(1885)という時代は、明治政府の散髪脱刀令(さんぱつだつたうれい)が出されて14年が経っています。「斬切り頭をたたいてみれば文明開化の音がする」と表された時代、有田にも、この時代の変化の波が到達していたことを、祭礼の絵図から伺い知ることができます。

この時代の変化が本当に文明開化と呼べるのかはともかく、日本にとっても有田にとっても欧米化の始まりであり、祭礼の絵図の人たちは時代の変わり目を象徴しているようです。

小溝上窯跡 発掘調査 (2)

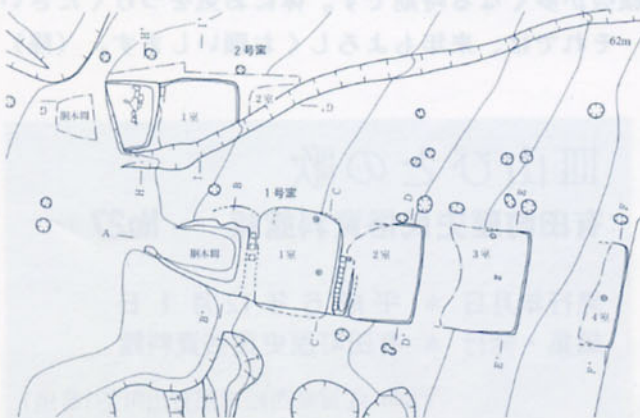


前回に続いて、小溝上窯跡について報告します。2カ月余りにわたる現地調査が無事終了しました。学生は大学の授業が既に始まっているにもかかわらず、発掘調査のために有田に残り、土日祭日を返上して調査に参加してくれました。

今回の調査で検出された遺構は登窯2基とそれに伴う物原です。登窯については1986年に佐賀県立九州陶磁文化館によって上部の焼成室が発見された1・2号窯と同一の窯とされます。今回は遺存状態が比較的よかった1号窯について説明しようと思います。1号窯では胴木間（最初の燃焼室）と焼成室4室（下部から順に1～4室）が検出されました。

(1号窯胴木間)

床、壁ともに2回以上修復されています。床と壁は炭と灰によって黒く覆われています。そして、奥壁は胴木間にしては傾斜がきつく、ほぼ垂直に立ち



小溝上窯1・2号窯跡実測図



小溝上窯1号窯跡（胴木間付近より見上げて）

上がっています。そして、次の部屋（焼成室）との間には通炎孔（温座の巣）の跡が残っています。6～7カ所の通炎孔があったようです。焚き口付近には大きな石が構築材として残っていました。片側しか残っていませんが、本来は両側にあったものと思われる。

(1号窯1室)

焼成室の中では最も遺存状態のよかった部屋でした。側壁は出入口がある側の壁は丸く胴が張っていますが、反対側の壁は直線的になっています。奥壁は次の焼成室（2室）の床の高さまで残り、通炎孔の跡が見られます。6～8カ所の通炎孔があったと思われます。炭と灰が堆積している火床（薪が投げ込まれるところ）と砂が敷かれている砂床（製品を置くところ）に分けられます。そして、砂床には溝縁陶器皿が2点残っていました。この1号窯で最後に焼いたときの製品と思われます。

(1号窯2～4室)

1室に比べてあまり遺存状態はよくありませんでした。2室では床境の跡がよく残っており、火床部分には溝縁陶器皿が1点残っていました。また、3室砂床に溝縁陶器皿とトチン、4室砂床に溝縁陶器皿が残されていました。

この1号窯や2号窯の下部の遺構の検出は調査前は予想していませんでした。1986年の調査で検出されていた窯が下まで続いていたとは考えていませんでした。やはり試掘だけではわからないことがずいぶんあるようです。 (野上建紀)

焼物づくり 今昔

染付有田皿山職人尽し絵図大皿

染付有田皿山職人尽し大皿には、江戸時代の焼物づくりの過程が描かれています。前回の泉山磁石場に引き続き、今回は磁石場から掘り出された陶石を追ってみます。

2 唐臼 (からうす)

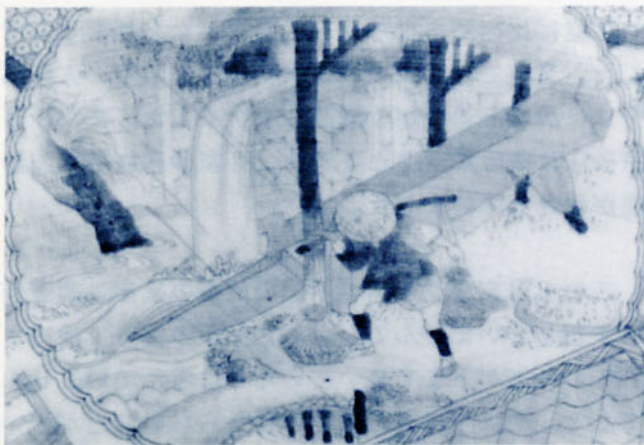
現在、陶石は粉にするために、クラッシャーやスタンパーと呼ばれる電動の機械で、短時間に粗砕、粉碎されます。

これに対し、大皿には唐臼によって、陶石が砕かれていく様子が描かれています。この唐臼は川の水流を利用した粉碎機です。江戸時代には「水碓」と書き表しました。明治以降に「水碓」を「からうす」と呼び、のちに唐臼の字を当てるようになりますが、江戸時代に何と呼んでいたかは不明です。

江戸時代、唐臼の所有には厳しい規制があり、窯元だけが唐臼を持つことを許されていました。また、唐臼には税金がかかり、その額は水量による生産能力の高低によって変わりました。

唐臼は泉山、中樽、白川、岩谷川内などに多く点在していました。しかし、蒸気や電気など安定した動力源が普及すると、唐臼はしだいに姿を消して行きます。今では資料館や白川にある復元された唐臼や大皿の絵などに、当時の姿を求めるのみです。

そして、唐臼の場所を示す唯一の名残が、白川川などの岩に見られる穴です。これは唐臼小屋の柱穴の跡です。昔、そこには唐臼があり、川の流れに合わせて稼働していたことでしょう。



染付有田皿山職人尽し絵図大皿の唐臼

街角の歴史

お知らせ

寄贈資料紹介

- ◆ 木白 1点 南原 島田 逸氏
有難うございました。

民俗調査

民俗調査も5年目に入りました。今年度は8月の民俗調査に引き続き、来年2月に最終的な調査を予定しています。駒沢大学民俗調査団の学生が、町民のみなさんのところに、お伺いします。現代に受け継がれている伝統行事、生活習慣、または、いろいろな昔の話をお聞かせください。最後の聞き取り調査となりますので、ご協力よろしくお願ひします。

おわび

皿山びとの歌No.26で取り上げました久富与次兵衛昌保につきまして、『崎陽好三保造』のふりがなは『さきようごのみさんぼぞう』ではなく『きようごのみさんぼぞう』、『礪山隠士山歌』は『礪山隠士山歌』です。おわびして訂正します。

◎ 明治・大正期の上有田駅、有田駅の写真を探しています。お心当たりの方は、資料館までご一報ください。

石場のこだま

寒風が吹く季節となりました。早いもので、もうすぐ今年も終わります。これから何かとお酒を飲む機会が多くなる時期です。体にお気をつけください。それでは、来年もよろしくお願ひします。(隆)

皿山びとの歌

有田町歴史民俗資料館報 No.27

発行年月日 * 平成6年12月1日

編集・発行 * 有田町歴史民俗資料館

〒844 佐賀県西松浦郡有田町391番地1
☎0955-43-2678 F A X 0955-43-4185